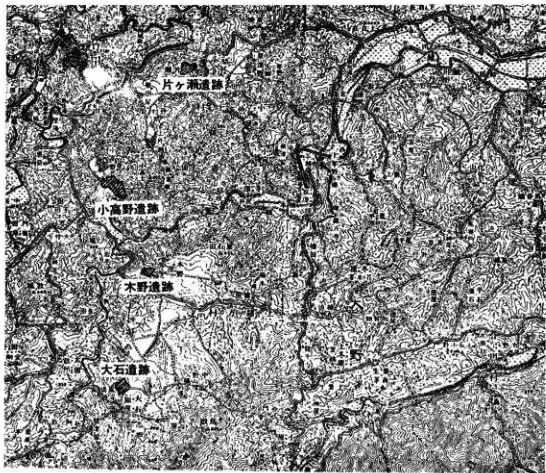


小高野遺跡調査報告

—大分県大野川流域縄文晩期遺跡の研究—

大分県竹田市大字小高野



別府大学考古学研究報告 4.

1974

本報告書は1973年（昭和48年度）大分県の補助金をもって緊急調査を実施した、竹田市小高野遺跡の調査報告書である。

まえがき

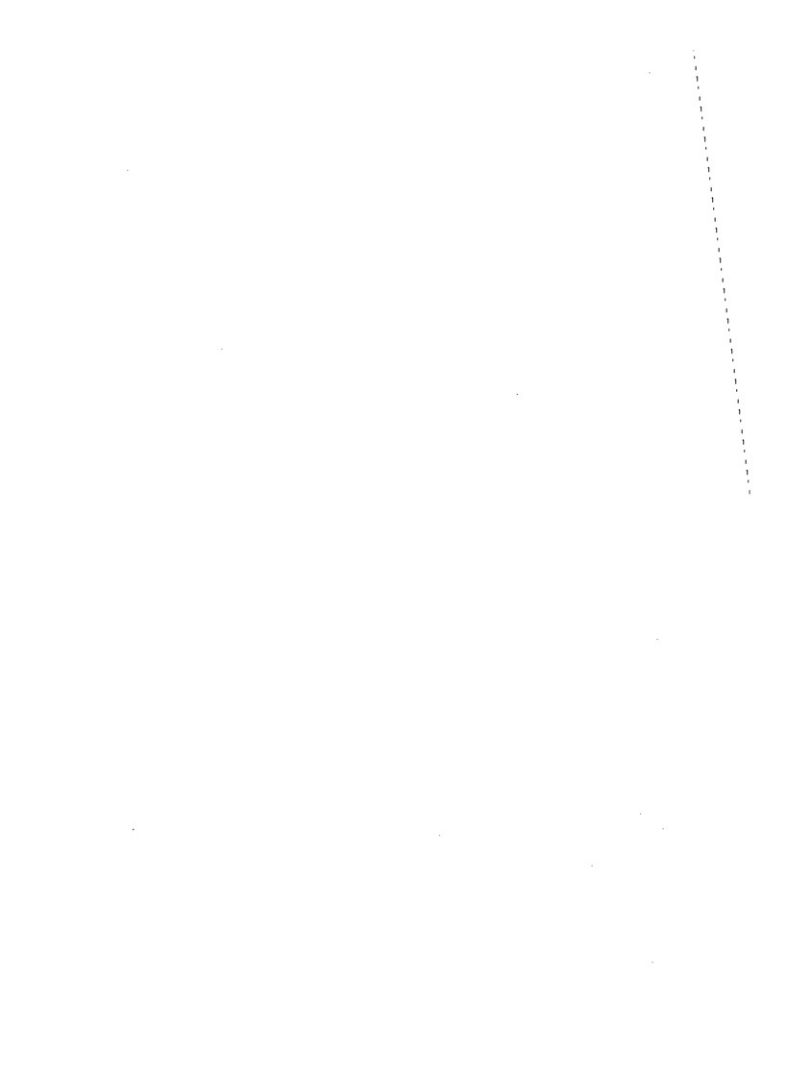
小高野遺跡は1960年以降わが国農耕文化起源に関する研究のうち、大石遺跡はじめ、木野遺跡（緒方）、片ヶ瀬遺跡（竹田）横迫遺跡、桜町遺跡（荻）など重要遺跡とともに、著名な遺跡であった。1962年竹田高校鳥養孝好教諭の基礎調査で、広範囲にわたる集落地帯が存在することを知った。その後大分県大野川流域の開発により標高 370m の洪積台地の南側一帯が水田化され遺跡は相当規模にわたって消失したと推定される。1971年3月、長崎大学医学部、坂田邦洋氏は、別府大学の調査として台地南部における鳥養氏調査のカメ棺出土地帯を中心に発掘を行い、ここに有望な縄文カメ棺数基を発見することができた。発見されたカメ棺は、縄文晩期Ⅲ式（夜白）期に相当するもので、この墓地群の発見は非常に注目された。

縄文時代終末期のカメ棺があるまともな状態で発見されたのは、晩期Ⅱ式の大野郡朝地町田村遺跡で、池田川の流域の扇状原であった。また、阿蘇外輪の東麓1952年以降ネギノや耕刈などの各地では、耕作中に晩期Ⅱ・Ⅲ式のカメ棺が各々1基ずつ発見されている。それらは、いずれも大塚主氏の注目するところとなり、この一帯に広大な晩期集落と、カメ棺群が存在することが明かとなった。こうした縄文晩期集落と、カメ棺を主体とする墓地群の存在が、大石遺跡や、この度の小高野遺跡の調査へと発達していった。

1973年大分県は、農地構造改革をすすめる大野川流域の重要遺跡である小高野遺跡を調査委託し補助金をもって発掘を実施した。この調査は10月におこなわれ、別府大学文学部と県立竹田高等学校郷土部、大分県文化課などの合同で実施、標高 370m の台地中央において縄文晩期の集落の調査にあたった。本書はその報告書である。

本調査は1973年度大分県の補助金をもって実施した。

（賀川）



小高野遺跡調査報告

—大分県大野川流域における縄文晩期遺跡の研究—

目 次

まえがき

- 1 遺跡の調査
- 2 遺跡の立地条件
- 3 遺跡の層位
- 4 住居址と条溝
- 5 弥生式の住居と土壇
- 6 遺物（土器・石器）
- 7 考 察

小高野遺跡の調査は、別府大学文学部考古学研究室が中心となり、1973年10月実施し、本報告はその成果である。本報告の整理は考古学研究室で実施し、執筆は、賀川光夫の他、別府大学の和田利徳（調査経過の一部と層位、石器）、平之内幸治、中島哲郎（住居址・条溝）、西哲弘（遺跡の立地）、若月省石（2号弥生住居址）、下村智、盛峰雄、井上秀文、荒武麗子（土器）がそれぞれ調査ヶ所の整理とともに担当した。賀川はその他の部分と編集をおこない報告の義務を果たした。

橘昌信は調査及び報告書作成までの調査作業の指導をされたこと、深謝する。

1 遺跡の調査

小高野遺跡は、1962年竹田高等学校民俗クラブ、鳥養孝好教諭の調査により全容が明かとなり、1971年3月長崎大学医学部坂田邦洋氏が鳥養氏の調査をひきついで、縄文晩期Ⅲ式のカメラ棺群の調査がおこなわれた。この2次調査について、1971年集落の構造や、立地を追求する目的で発掘を実施し、縄文晩期Ⅰ式の竪穴と、弥生式住居遺構その他を発見し、重要な遺構の調査となった。特に縄文晩期の竪穴式（方形）の住居と、弥生式の竪穴（円形、前期末）の二つの住居が接近して発見され、その両者を弥生式（前期以降と推定）の方形竪穴が切り合って発見されていることは興味深い。しかも注目すべき点は、従来の扁平石器と考えられる石器が、縄文晩期住居と、この住居を南北に串刺しする如く走る、浅い平底の溝から発見され、この一括遺物で土器、石器の組合せと用途がある程度明確にされたことは注目される。

この晩期住居址と弥生の竪穴は明かに構造も異なり、両者の関係から、小高野遺跡が可成り明かになった。すなわち、縄文晩期Ⅰの住居と、晩期Ⅲのカメラ棺、そして弥生前期末（城ノ越式）の3時期の遺構をこれまでに発見したことになり、ここに先史時代の小高野遺跡における推移、集落の展開とその目的などがある程度細部にわたって研究されることになった。本調査における異なる二つの住居址の発見から、中部九州山岳地帯における縄文晩期の集落が、弥生時代と同じく、定着農耕としての目的をもつことを意味し、注目された。

（賀川）

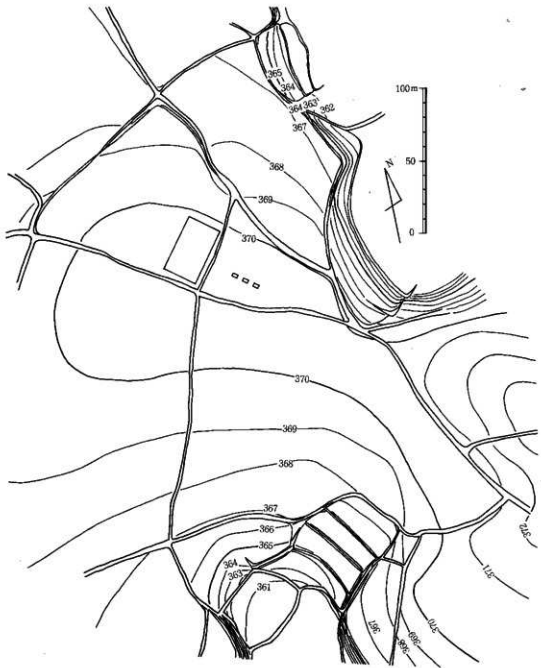
調査参加者

考古学関係 賀川光夫（別府大学文学部教授）、後藤重己（同助教授）、橘昌信（同講師）、岩尾松美（同嘱託）、鏡山昭子（同短期大学部講師）、鳥養孝好（竹田高等学校教諭）、大塚主（荻小校々長）、牧尾義則（別府大学学生）、坂本嘉弘（同）、和田利徳（同）、森永弘太（同）、平之内幸治（同）、中島哲郎（同）、爪生田文子（同）、安部保代（同）、下村智（同）、盛峰雄（同）、若月省吾（同）、井上秀文（同）、西哲弘（同）、荒武麗子（同）、中塚弘子（同）、園田真寿子（同）

地理学関係 小野忠照（山口大学教授）

2 遺跡の立地条件

小高野遺跡は大分県竹田市大字人田字小高野に存在する縄文晩期の遺跡である。阿蘇の東方外輪高原は、顕著な熔岩台地が東に延び、各所に源をもつ河川が、熔岩台地を侵蝕して、深い河谷を形



第1図 小高野遺跡地形図

成する。したがって台地は、各所で河谷のために孤立し、それぞれ、独立した台地を形成する。これらの台地は全体として西（阿蘇山）方面から東へ向ってわずかな傾斜をしているが、表面は平坦な原野となる。丘陵を各所で接断する河谷をみると、厚い安山岩や凝灰岩の堆積露頭がみられ、更にその上部では、褐色、黒色などの火山灰が幾重にも堆積している。一見段丘状にみえるこれら河谷兩岸の台地は、熔岩の堆積と、火山灰の堆積による洪積期の丘陵ということが出来る。

小高野遺跡は、西南から東北に向う大野川水流と、同じ方向の門田川（大野川支流）と大野川、門田川より南北に走る大谷川などの小谷によって、四方を侵蝕され、完全に孤立した丘陵となる。大谷川を挟んで東側には、片々瀬台地が、やや広い面積の孤立丘陵として並ぶが、こうした四方を河川の侵蝕によって孤立した丘陵は、この地方の各地でみることが出来る。

小高野の台地は東南に小富士山（457m）があり、この一帯の平坦な丘陵の何処からも望見することができる。この小富士に接して東側に小高野の台地が展開し、台地は南北に長不定形をしており、南北1km強、東西の最大巾は500mである。この丘陵は最高標高370mで362mの等高線におさまり、それより急傾斜となって四方の侵蝕谷に落ちる。北側の門田川には130m、南側の門田川では110mの高低差をもつ。

現在の集落は、台地の東北部に存在して、集村形態をとり、西南一帯は畑地、台地の西南縁に近い一帯は最近水田化され、台地の中央で、水田と陸田が接し、調査時には水稲、陸稲が判然と熟していた。水田化された西南一帯の他は、ソバ、トウモロコシなどの栽培がおこなわれており、門田川を挟んだ対岸、木野台地では、アワの栽培も今にみられる。

遺跡は、小高台地の全域に及ぶものとみられ、遺物の散布は、集落の南共同墓を中心とした水稲、トウモロコシ畑、ソバ畑などの一帯が中心で、この南側は先年水田化の際に大量の遺物が出土したといわれる。散布している遺物の多くは、縄文晩期土器、弥生前期末土器、それに石斧、石鎌などであった。この台地の中央一帯が遺物の散布状況からみて縄文、弥生の集落が営まれた地帯であることは当然考えることができた。この遺物の最も多量に散布する台地中央が370mの最も高い場所を占めるため、これよりわずかに傾斜する南側に主要な集落が存在することは確実である。しかし、その一帯が水田化されて遺構は消滅したとみられるために、調査区は、台地の中央やや北側の共同墓地の南側において設定し、発掘調査が実施された。

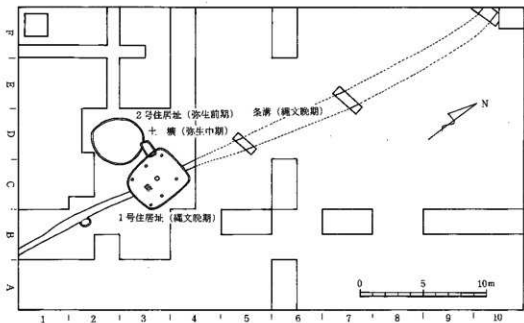
1971年3月の調査は、台地の南側、縁端部においておこなわれ、縄文晩期Ⅲ式のカメ棺5基の調査をしているので、晩期全期（B.C796年 大石晩期1式、B.C405年 唐津市汲田まで391年間）約400年の間、集落が維持されたとみられる。更に弥生前期末（城ノ越式）に至り、再度の集落を想定することができた。1971年の2次調査以降以上の如き想定でこの度の調査区が遺跡の立地条件

を考えて設定されたのである。

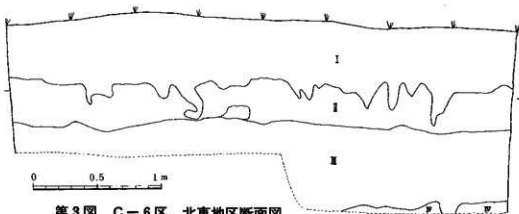
(西)

3 遺跡の層位

調査は、集落のもっとも存在可能な位置をえらび、東北より西南に向って調査区を設け40×25mの範囲で遺構の探索を実施した。この調査区では南西側に寄って遺構が、北東側では遺構の攪乱がみられ、調査の焦点は、南西側にしぼられた。又主調査区の東南側に道路をはさんで一列のグリッド五区を設けたが、この部位では層序の攪乱いちじるしく、この調査を断念した。



第2図 遺跡発掘実測図



第3図 C-6区 北東地区断面図

層 位

I層…黒褐色土層 上部に耕作土を含み、全体が細粒子の黒色で、その下部5cm~10cmの間に遺物包含層とみられる層が含まれる。この遺物を包含する部分は耕作土に比して、色調同一なるも若干粘土質がみとめられる。

II層…黄褐色土層 粘質がみられ、一部にパミスを含む、この層が本遺跡の主包含層でその上部10m~15mは特に遺物の包含顕著である。I層下部と同様に遺物がこの部位に集中する。

III層…暗褐色土層で粘質をおび、土質はII層と大差なく、色調の変化でII層と区別される。遺物の包含はない。

IV層…黄色ローム層で粘質強く、洪積層と考えられる。

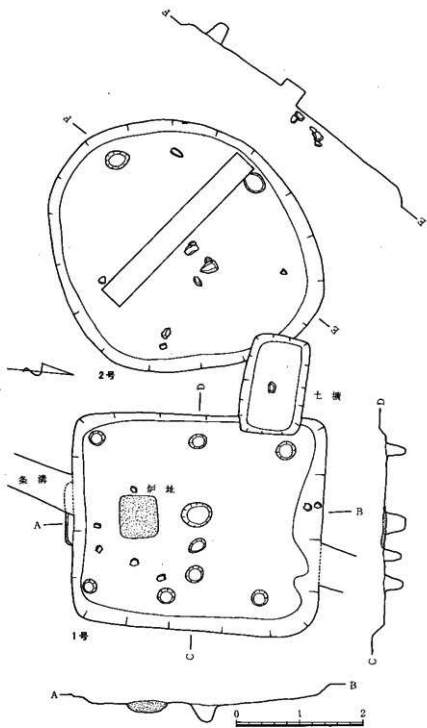
遺跡全体では、包含層が稀薄で、栽培のために各層が深く攪乱された場所が広く、調査区域全体として遺物の包含状態を観察することはできない。一部では包含層の消滅された場所すらあった。

(平之内)

4 住居址と条溝

遺跡の南西から北北東に向って、直線的に走る溝状遺構が確認され、それを追跡する際、方形のプラン遺構が目ざされた。溝状遺構の追跡と並行して、この方形プランの確認作業を実施したところII層上面よりの明かな掘り込みになる竪穴(3.80cm×3.25m)が発見され、竪穴住居址であることが明かとなった。

住居址は、II層上面より、西側で20mほど東側で30cmほど掘り込み、床面は、全体的に東にむかわずかに傾斜していた。また住居址の北側の一部は、住居を貫く溝状遺構(住居消滅後)による攪



第4图 住居址实测图

乱のため、壁面を明かにすることは不可能な状態であった。

住居址の堅穴は全部で9個確認され(床面からの深さは、約30cm)その内6個(東側3個、西側3個の等間隔で並んでいるもの)は、住居全体の支柱として、また中央の径40cmの柱穴は、家屋の中心をなす柱穴と考えることができる。

炉址は、南壁中央に突出した掘込み(入口と推定される)より1mほどのところにあり、床面を浅く方形に掘り込みこんだ60×70cmの簡素な構造で、床面に4cm程の焼土が盛り上って堆積し、焼土内より、多量の土器の破片が出土し、モモの堅果も発見された。また炉址は堅穴中央の支柱に近く、この支柱から東側に2つの柱穴が並び、住居を2室に仕切る。したがって、炉は前室(西側)に設けられたことになる。

方形隅丸の3.80×3.25mの長方形堅穴式住居は北側の一部を除いて完形の状態で発見された。住居は、南西から北東に向かって走る溝(巾50cm、深さ20cm)の浅い溝が貫通し、この溝に縄文晩期Ⅱ式の土器が単純に出土し、住居址の土面(床面に及ばぬ程度)を走る。そのために、住居が全体として破壊されることなく保存されたわけであるが、溝と住居は偶然にも層位関係をしめず結果となった。住居址出土の土器が晩期1式土器であるが、床面の土器が小破片で周辺が磨耗していることは、後に、溝状遺構の造築と、その利用によるものと推定される。

また、この住居址は、北側において弥生式時代の土城と切り合い、はからずも、晩期Ⅰ式堅穴が、Ⅱ式の溝状遺構と、弥生時代の土城の3時の遺構の切り合いという複雑な様相のもとで、その大部分が保存されたことは興味深いものといわねばならぬ。

晩期Ⅰ式の住居が堅穴式住居として発見されたことの興味は後述するとして、晩期Ⅱ式の条溝が、隣接の荻町横迫遺跡の条溝(晩期Ⅰ式B)とともに周落の構造上重要なものであることは確かで、この追求は注目される。(平之内・中島)

5 弥生住居(2号)と土城

弥生式住居址と考えられる皿状の堅穴は、縄文晩期1式の住居址(1号)の西側に併列して発見された。1号と同じくⅡ層黄褐色土層上面からの掘り込みによる堅穴で、長径4.50m短径4.00mのほぼ円形のプランをもつ。現在調査によって確認される堅穴造成当時の壁の立ち上がりは、約15cm程度の浅いものである。

堅穴の床面は、中心に向かって皿状に傾斜し床面の保存は必ずしも良好ではなかった。柱穴は西側に2個発見されたのみで、屋舎の構造を知ることはできぬ。中央に集石が発見されて、この部位が

炉址とも推定されたが、焼土・焼石の類が稀薄であり、一部の集石が遊離していることなどから後世の集石と考えることもできる。竪穴内部の包土は黒色土層である。

遺物は1号住居(縄文)と同様、黒色磨研土器、深鉢形の粗成土器などの小片が大半をしめ、扁平打製石器や晩期特有の符棋の駒形石鏃などが出土された。しかし、これは、2次の堆積で、床面より出土する遺物は少量であったが弥生前期末の城ノ越式土器口縁部や磨製石鏃などがセットで見られている。この両者は、表面調査においても若干の散布をみるので、可成り広い範囲の遺構が存在するものと推定される。

竪穴遺構は住居址と考えてよいが、円形プランのため、住居形態の想定はできるとして柱穴の不備や、炉址の未確認など問題は多い。(若月)

土 壇

1号住居址(縄文晩期1)と2号住居址(弥生前期末)とが東西に併列しているが、その両者は1m程度の間隔をおくだけであった。この間隔に割り込む如く、両者の北隅を切断して土壇が掘られていた。土壇は、東西に1.50m(長軸)巾1.00mの長方形で、深さ80cmを数え、長方形箱式である。壇底部に角石一隅が安置されていたが、これは、壇底より若干遊離していたため直接遺構と関係あるかどうか明確でない。内部より出土した土器は、弥生式土器の底部で、中期土器と推定された。

土壇が西側の弥生前期住居と切り合いになっている点で、層位的前後関係にあることは理解されるが、出土遺物から住居が前期末、土壇が中期と推定されることになる。また長方形箱形の垂直な壁をもち、深さが80cmに及び底部が平たいことは、木棺などの安置可能で、弥生中期の木棺墓として注目すべきでなかろうか。(和田)

6 遺 物

小高野遺跡では、時代を決定する容器として、縄文晩期の土器が中心をなし、一部に弥生式土器が出土した。この土器について、それぞれ土器に共存する石器もみられ、土器、石器のセットとして遺跡における人工的生活遺物を観察することができた。

自然遺物については、住居地域での入念な水洗方式、特に晩期1式の竪穴内においては、最大の注意をしたにもかかわらず何ら遺物の検出をみない。ただ炉址より、モモの堅核一点が観察され、精度な検査を実施しつつある。

土 器

深鉢形土器…縄文晩期1式（大石b式、横迫式）b、にあたる晩期初頭の形式（大石2770土120年、B9 TK 128）で、深鉢形の口縁部すなわち体部から起立するタガが次第に内傾から起立、そして外反の方向にむかうもの（第5図1内反、2起立、第6図4・9外反、第7図3.7外反）を晩期1bとして1式aの大石式と区別分類している。この深鉢形の体部、口縁から起立する「タガ」の巾広い部位には通常数本の凹線文や、沈線文が施文され、1式からカメラ形への傾向に向う1式bまたは晩期2式においては沈線から条痕に移項する傾向が強い。また外反の著しいものには無文のまま放置され、沈線文の消失の傾向もみられる。

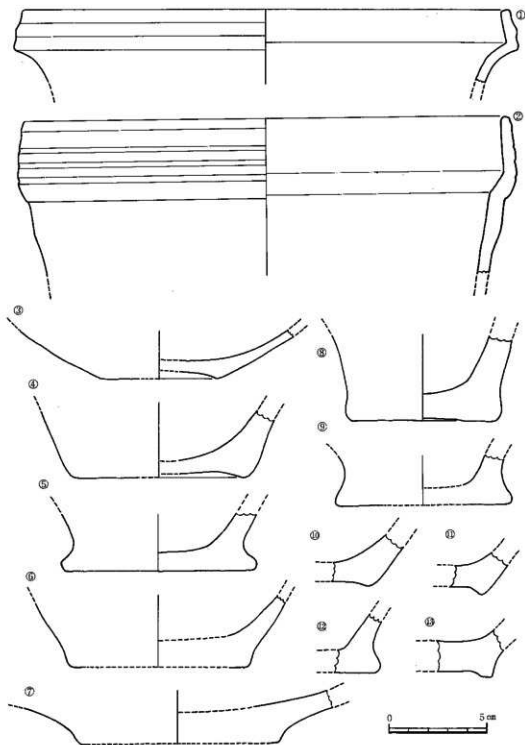
鉢形土器は、胴部がく字形に張り、その上下附着部に界線を意味する凹線（沈線）一本を施すことが多い。また口縁部の外反傾向のb式は胴部の誇張がく字形をとらず単なるふくらみの場合と、ゆるやかに底部への移項をみることがある。胴部く字形に屈折するa式は、底部が上げ底をなし、b式は上げ底と一部に円盤形貼り付けが共存する。いずれも相成土器であるが、表面の磨研はa式において顕著である。

鉢形土器…鉢形土器の出土のなかに、外反した長頸の口縁部からしまりある頸部を形成し、球状の胴部と、上げ底の底部からなる瀬戸内東部、滋賀里や標原式の土器が晩期1式に存在する。これらの特有の文様形態として、口縁の波頂部から派生する弧線文（第6図5）など後期末宮滝式の伝統の変遷を考えさせるものがある。晩期1式a（大石）には更に顕著にその影響がみられた。東九州の晩期1a、bの各時期の一つの特徴といえる。

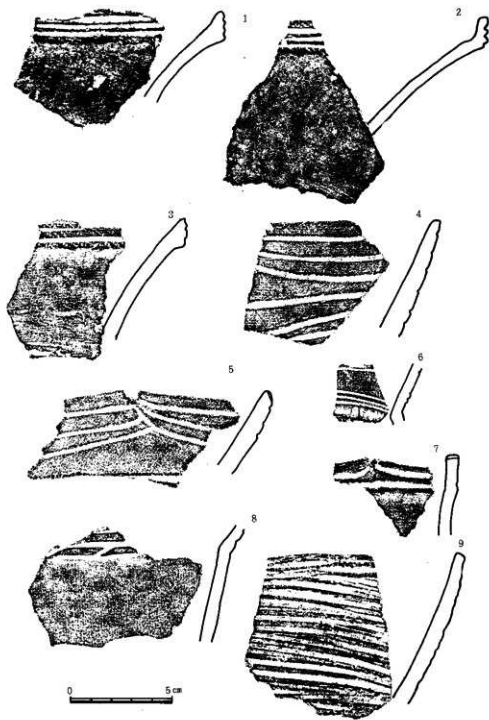
浅鉢形土器…所謂黒色磨研土器という顕著な黒色土器の一群である。比較的長く外返する口縁部をもつのは皿状の浅鉢（第7図、1、4、7第8図11、13、14）反りが強く短いものは中鉢（第7図2、第8図10、12）などに分かれる。口縁部は体部の先端に粘土紐を巻き一段の屈折をつけるのが特徴で、その外、内部に凹線をもつことが特徴とされる。この形態の特徴は、晩期1b式、晩期II式の普遍的特徴である。

土器形成には、細かな粘土をもちい、薄手に整形する。表裏面は研磨著しく、黒色の光沢をもつ。焼成は実際に窯址の発見なく分明的でないが、実験的な問題を後述する。大形のもの口径50cmをこえるものから、小形なもの口径10cm内外（第8図16、18）まで自在に細かな技法で端正な同形土器を作る。

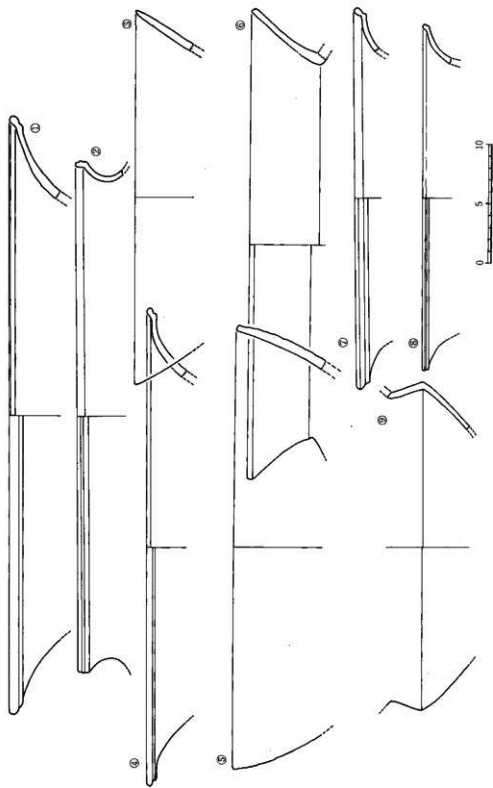
皿形土器…浅鉢形土器の胴部がみられず口縁部からゆるやかに底部にむかう浅い皿形の土器で、口縁部の体部先端に粘土紐をつけることによって唇部を形成すること浅鉢と同様である。黒色磨研



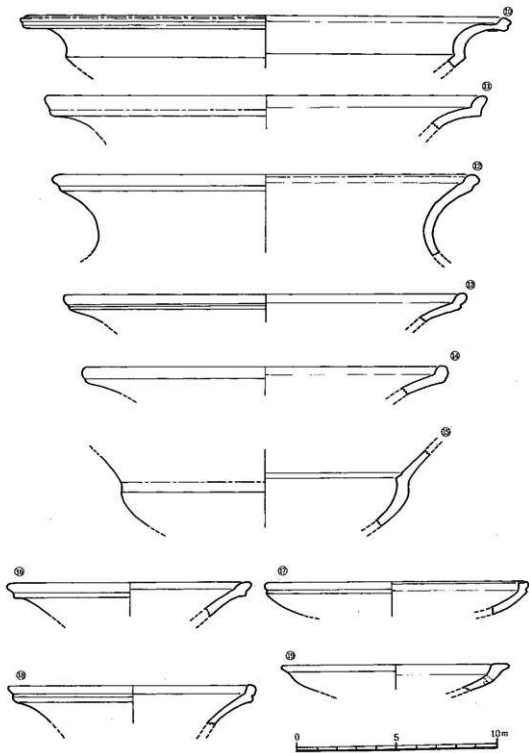
第5图 土器实测图1



第6圖 土器拓本



第7图 土器实测图2



第 8 图 土器実測图 3

土器の顕著な土器で口径16cmの小形のものが多い。

縄文後期土器…包含層の一部で、口縁部に3～2条の条線をめぐらし、その部位に、縄文をころがす、口縁部屈折又は肥厚の土器が数点出土（第6図1～3）している。所謂後期中葉末（縄文後期磨消縄文Ⅲ式土器一西平式）の深鉢形の口縁部と推定される。同図6は、その胴部への移項部で、全体としてしまりある磨研土器と思考される。小高野遺跡では稀有な土器であるが、後期遺構の探索も必要となろう。（下村、井上、盛、荒武）

石 器

当遺跡における石器は、大石遺跡はじめ各地の晩期遺跡とほぼ同様で、その内訳は扁平石器の一群、打製石斧、磨製石斧、石廔丁形石器、それに磨石、凹石、石鎌、石錐、スクレイパー及び多量の剥片（安山岩、黒曜石、サヌカイトなど）と安山岩の石核である。

扁平打製石斧…37点（縦剥ぎ剥片を素材とするもの、5点、横剥ぎ剥片を素材とするもの、25点、不明7点）出土したが、そのほとんどが一方に自然面（礫面）第10図1～4を有するものである。形態は撥形を呈し、使用痕は先端部に斜めにみられる。破損品はほぼ半ばあたりで折れており、使用痕とともにその用途がうかがえる。両面加工のもの5～8も使用痕などから用途の類似が指摘される。

9は分銅形石斧で、上半部は欠損している。刃部は丹念な二次加工で形成され、先端は使用のため磨滅している。

磨製石斧…蛇紋岩を使用したものと局部磨製石斧の結晶片岩を使用したもの、いずれも先端を蛤刃状に加工した薄刃の斧（10-11）で一部に刃こぼれをみる。

石廔丁形石器…全部で5点出土したが、すべて横剥ぎ剥片を使用し、うち自然面を有するものが3点（第11図13～15など）ある。12は他に比べるとやや大形で、表裏とも丹念な二次加工をほどこし刃部としている。14、15の刃部は共に主要剥離面側からの粗雑な加工がほどこされているのみで、大部分は剥片の一部を利用した大形の Side-bladeとみてよい。使用痕はいずれも刃部に斜めにはいっており、扁平打製石斧に比べて折れが少ない。石器の一部には使用のさいの手擦れも可成り観察されるので、これらは石廔丁としての用途を考えてよい。

凹石・磨石…凹石は3点出土したが、いずれも砂岩の河原石を使用し、直径10cm内におさまる扁平な凹礫で、表裏又は一方にくぼみがある。

磨石は数点出土したが、いずれも破片で凹石の如く砂岩を主体とした扁平石であった。

石鎌…7点の出上をみた。チャート製2点、サヌカイト製3点、姫島産黒曜石製2点で第9図

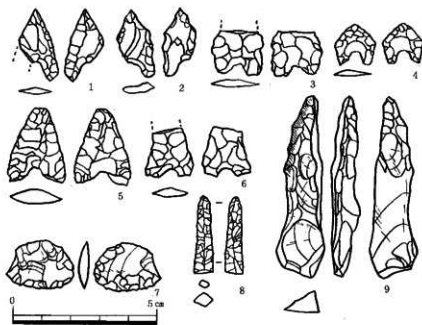
1～4は将棋の駒形鐵といわれ、全出土の半数をこす。石鐵の身に肩をつくるこのタイプは扁平で一般に加工し易い安山岩系統の石を使用することが多い。その他の石鐵も扁平性が強調され、石鐵自身の後退が目立つ。

サイド、ブレイド…チャートの縦剥ぎ剥片を使用し横2.1cm縦1.5cmの横長のblade で表裏とも丹念な二次加工がほどこされている。全体に薄く最大厚3mm強で、刃部と反対側にはわずかに縦ずれの磨痕が観察される

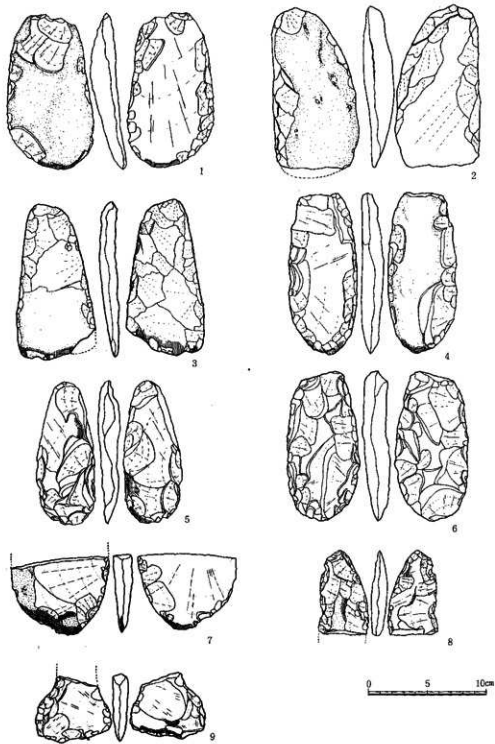
石鏃…チャートを使用し、先端部のみ発見された。加工は全体に及び、断面菱形を呈す。

スクレイパー…姫島産黒輝石の縦剥ぎ剥片を使用し、先端部は特に念入りに加工がほどこされているが、はげしい使用のため磨滅が著しく、そのために剥離が一部不明確になるほどである。

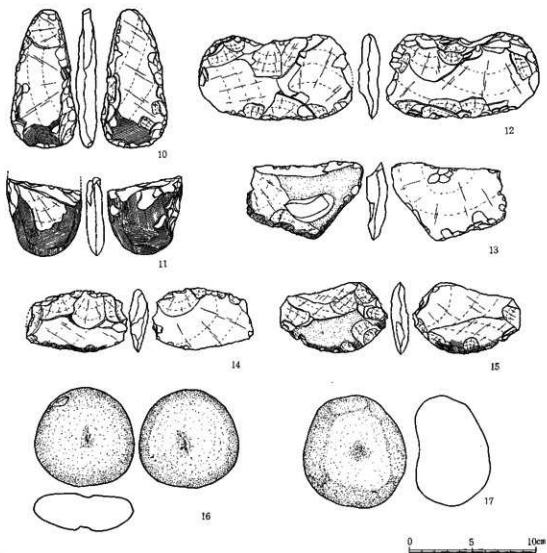
(和田)



第9図 石器実測図1



第10图 石器实测图2



第11図 石器実測図3

7 考 察

大野川流域における縄文晩期の研究は、すでに長い。そしてこの一帯の洪積台地や、その周辺での扇状地、岩陰その他の遺跡の基礎調査は膨大な数にのぼる。土器、石器の分類や整作技術、その用途については近刊の「大石遺跡」において充分検討されている。われわれは、これら人間が農耕をはじめた段階から、土地というものに対するはっきりした意識(1978・米倉)をもつようになったことを、この一帯の調査で充分に考えさせられた。台地の上は火山灰におおわれ、そして、その平坦な台地にお

いて、焼畑からはじめて定着農耕への土地利用をこころみた。それは人間の衆智を集めた集落のはじめての固着でもあった。初めの集落は、単なる血縁の集合であったかも知れない。しかし大石遺跡にみるような、一種の共同体総合の集会(1967・賀川)の施設は、土地利用の構造的の基本にもとづく高度な遺構と考えねばならぬ。集落は、そうした血縁の共同体の域を次第に越えて、地縁的な広大な範囲にわたる統一的配図(1973・賀川)を考えねばならぬ。こうした大きな集団の想定は、大石遺跡の集落の中に営まれた大竪穴(集会所)であろうし、採集民が主としておこなう屋外(野営的炉)の炉址が、各個の住居のなかでみられ、この炉を中心として基本的な生活が独立して営まれることが、農耕生産によってもたらされた、共同体のもっとも小さな単位である。血縁をともにするもっとも小集団を単位集団と呼び習わしは、弥生文化研究のうえで充分考察されているが、炉を屋内にもち、夫婦を中心とする家族集団が、野営的採集民の屋外炉址での単位から分離できることが、ひいては土地に対する意識のあらわれてであろうと考えるのである。

もっとも小さな集団である単位集団は、家屋内炉址の登場で、更に家族集団という基本的構造の芽生えにより、それらが定着方向において土地の問題を社会的に制度化の方向に推進して行った。少くとも縄文晩期の農耕の問題は、そうした農地に対する固着観念から土地利用の問題を提起せねばならない段階になった。そこから派生して生ずる問題は多くあろう。葬制の問題や、神の構造、そして首長制など、だがその根本的課題は、炉を屋内にもつという家屋構造が、それをとり巻く小集団とのかかわりから、如何なる集落を作り上げて行くか、この点が問題である。

縄文時代の集落は最近の大規模調査で相当に求明されてはきたが、八幡一郎教授(1969・八幡)が主張する如く、あるLevel(時間)の同時存在を明かにした報告は案外に少く、広大な発掘地での竪穴の切り合いから集落自体の問題を明確にして、あるLevelでの生活構造を知ることにし度いものである。こうした研究では、大林太良氏の「縄文時代の社会組織」(1971・大林)の如く、民俗的資料にもとずいて縄文時代の構造組織を論述することに大きな関心をもたねばならぬ。

九州の東部山岳地帯での、黄土地帯に似た場所で稲以前の農耕がおこなわれたとする考えはすでに筆者(1971・賀川)の他多くの民俗学者(1971・72・佐々木)や育種学者等(1969・上山他)が問題を提起している。しかし考古学的問題の一つの提言は、他の多くの派生的問題は別として、農耕の開始とともに起こってくるとみられる土地の制度化である。

縄文晩期の集落…今日迄東九州山岳地帯を西から東にわたって流れる大野川の本流とその支流の深い溪谷で接断されて、孤立化した燔岩台地で縄文晩期集落の研究を目的とした調査は、大分県大野郡緒方町大石遺跡(1966・賀川他)、大野郡荻町桜町遺跡、同横迫遺跡(1971・賀川他)、それに1973年平安博物館により大野郡大野町宮地前遺跡(1973・平安博・渡辺)そして本報告による竹

田市小高野遺跡の計5ヶ個所の遺跡である。それらは、大石遺跡を頂点とする縄文晩期1式aより若干時期差ある1式bにわたる遺跡群で、晩期II（黒川—南九州、磯石原—北九州）に先行する時代で、ある時期Levelをねらった興味あるものであった。

学術的目的の調査であるため広大な面積の発掘が不可能であるため、年次計画を立て、数次の調査を行ったことになるが、ともかく、こうした各地の集落の構造へむかっての調査がおこなわれた。

大石遺跡の場合…集落は台地の西南部に集中し、平地住居で、中央に扁平石を安置し主柱をささえたとみられる家屋が密集する。東部末調査部を含めて馬蹄形になるものと推定、中央に遺構のない広場があって、その真中に径8m、深3m、の大堅穴があり、3段の階段によって中央のステージ（径3m）に通ずる集合所が存在した。（晩期1式a）

横迫、桜町遺跡の場合…家屋の構造は明かではないが、柱穴の存在は相当確認されるので、おそらく平地住居と推定、この柱穴群を条溝をもって仕切る。（弥生式の集落と類似）この場合、溝の性格を更に確認する必要がある。なおこの条溝は熊本県上益城郡益城町古閑遺跡においても確認され、更に小高野における条溝とも関係して晩期1式bの時期に一般的な集落形態となりつつある。

宮地前・小高野遺跡の場合…集落全体の発掘は今後の問題であるが、宮地前では堅穴の一部、小高野では堅穴の全域が明かとなり、小高野遺跡の住居構造から宮地前の一部露出の構造を推理され、ほぼ同形とみられる。住居は方形隅丸で、中央を仕切り二室とする。前室に炉を設け、床はつき固めている。条溝は住居の床面同位の深さで住居を切っているが、住居とのLevel差・層位があって、溝は晩期1式bと判断された。

以上の集落と住居の関係では、晩期1式aは大石、桜山遺跡で、共に平地住居、1式bの横迫、小高野遺跡では、条溝をみ、熊本県古閑遺跡においても同様条溝をもった集落といえる。また宮地前、小高野では堅穴式住居となり、およそ集落と住居の関係が明かとなった。

集落の環境は周辺を溪谷で仕切った孤立丘陵（上面熔岩台地で平坦）を占め、晩期初頭は、平地住居で、大石遺跡の如く、単独の集落で維持するには問題のあるほどの集会所をもつ。

晩期1式bには条溝をもって集落を形成することが明かとなる。条溝、環溝集落は弥生集落の典型（1950・鏡山）で、すでに各地の弥生集落で立証されている。したがって弥生時代の集落との類似がみられる。平地から堅穴式住居への移項、派生的問題で主題としないがカメ棺の発達など、晩期1式bは大きな転換期といえる。

縄文晩期1式の土器と石器…縄文晩期七器の編年に1式—III式（1969・賀川）を設けたが、これについては近く後期後半を含めて集成を行うつもりである。そして黒色磨研土器と半島、大陸との関係には比判（1968・佐原他）も多い。また石器についての器具としての問題にも多くの比判がある

が、これらは、ここでふれずにおく。

晩期1式土器の場合、胎土が一般に精細なものであること、土器が研磨されて光沢をおびていること、土器の三つの部分に屈折のみられることなどで、整成技法に問題があることをあげる必要がある。精成された胎土使用にかかわらず、必ずしも硬度に焼成されていない点は、その形態のゆがみのない点と併せて酸化炎や還元焔などを合理的に使用する方法では不可能であり、多くの実験では、酸化炎で焼成し焼度の高いうちに芝や木葉の中に埋没させて二次的に蒸し焼きする。次に当初より枯芝や木葉などで長時間蒸して焼成する。この二つの方法が最良であるが、前者では焼度が強く胎土とのつり合いがとれぬ。したがって後者をもっとも晩期土器に近い状態で仕上げられる。現在不能な方法でおこなわれる最良の方法はオガクズの中において長時間の蒸し焼く方法があるが、当時これは考えられぬ。

次に三つの屈折部があるが、これは、輪積部の接合によるもので、胴部以下、長径部、口縁部と、その成形には「ロクロ」の前段、回転台の使用は存在したものと推察される。特に深鉢や、浅鉢の口辺部にみられる凹線又は沈線文は、回転台なくしては不可能な施文技術である。

小高野遺跡においては、一方に礫面を残す扁平打製石器が多く確認された。これは、礫の一方を打撃して作った打面から、周辺の第一次剥離の剥片を調整したものである。この石器は、刃部及び全面を研磨して、より機能を果たす目的の土掘り具とするためのものと考え、礫面を一面に残す方法は、きわめて機能的である。

さて、扁平石器を鋸と判断したことについて、これまた大きな批判があったが、刃部にのこされた使用痕（磨耗）と着柄の磨滅とから考えると、突棒先端に着装した鋸形とみられる。曲柄に着装する方法は実際の効果あまりみられない。実験には、突棒先端を割りそれに挿入して固着するとそれ自身の重量がふえて機能を倍化する。または手持ちのフグシ、すなわち移植機としての掘具があり、刃部の磨滅と同様に、全面に手擦れのある石器が含まれる。

この扁平石器については、製作、用途などその実験的問題とあわせて、あらためて加筆することにした。

小高野遺跡農耕の問題…周辺を深い谷によって孤立した熔岩台地は、すでに述べた如く、縄文晩期の単純遺跡の場合が多い。また一部に弥生前期末の集落が複合するが、これら集落は、台地の一部を占め、それぞれ、畑作がおこなわれていたものと推定する。隣り合せに存在する同じ条件の丘陵にも、同じ規模の集落が推定され、季節的に主要拠点において巡回するという自然民の拠点としては規模が大きく、弥生式の集落同様に「高城」的要素をもった高地占拠の利用がみられる。条溝により集落と農地を仕切る構造は、当然弥生の集落の先駆的なものである。集落内部における墓



第12図 アワ畑 (上) —小高野遺跡のみえる木野遺跡附近
キビ畑 (下) —竹田市ネギノ遺跡附近

の占定にも、集落の固着化が当然考えられる。

われわれの努力にもかかわらず植物遺体の発見は非常にむずかしく、その栽培を想定することは非常に困難であるが、陸稲の存在も可能であるが、ここでは稲以前の作物を考えねばなるまい。即ち、アワ、ヒエ、キビ、ソバなどの栽培は台地で絶好といえよう。これらアワ、ヒエ、キビ、ソバ類は扁平石器による耕作可能ばかりではなく、ソバ等数度の収穫を期待できる作物が重視されることが重要である。

現在、この地方での近代化は大きく農村の形態をかえた。そして、晩期遺跡は、その近代化のために灌漑用水によって水田化され破壊をうけた。だが労働人口の都市化により、それらの作物の管理が不可能となると、台地は荒れるにまかせることになる。その中で、白いソバの花が咲き、秋にはアワと、キビが実る。そしてナガイモを踊るため木製の長鋤を手にした農夫が路を通る。牧歌的な風景だが、いかにも時代おくれしたとみえるこの風物は、実はもっともこの風土に適した農耕、球根と穀類の栽培法なのである。直接現金となる作物はタバコの植付けであろうか。クリ林、雑木(クスギ)が台地周辺に茂げり、ソバの白に花が咲き、それが収穫されるとメグリ棒で脱穀される。そんな風景を、ふと縄文時代晩期の映像にかえることができるような気がするのである。

参 考 文 献

- | | | | | | |
|------|----------|---|-------------|-----|-----------|
| 1973 | 米 倉 二 郎 | 地割の源流 | 地理科学学会 | 20号 | p 1-6 |
| 1967 | 賀 川 光 夫 | 円形土壙の発掘 | 考古学ジャーナル | 6 | p 12 |
| 1973 | 賀 川 光 夫 | 原生国家の崩壊と古代国家の成立 | 生活と科学 | №13 | p 3-8 |
| 1969 | 八 幡 一 郎 | 縄文中期文化 | 新版 考古学講座 | 3 | p 101-102 |
| 1971 | 大 林 太 良 | 縄文時代の社会組織 | 季刊 人類学 | 2 | p 3-78 |
| 1971 | 賀 川 光 夫 | 大分県の考古学 | 吉川弘文館 | | p 107-118 |
| 1971 | 佐々木 高明 | 稲作以前 | NHKブック | | p 34-82 |
| 1972 | 佐々木 高明 | 日本の焼畑 | 今古書院 | | p 94-108 |
| 1969 | 上 山 春 平編 | 照葉樹林文化 | 中公新書 | | p 85-190 |
| 1966 | 賀 川 光 夫他 | 縄文晩期農耕文化に関する合同調査 | 別府大学 | | |
| 1971 | 賀 川 光 夫他 | 縄文晩期農耕の起源に関する研究—大分県萩町桜山遺跡・恵良原遺跡 横迫遺跡 | 別府大学考古学研究報告 | | 2 |

- 1973 渡辺 誠他 大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報 平安博物館
- 1950 鏡山 猛 環溝住居址小論1,2. 史淵67,68合編 p-1-26
71輯 p1-23
- 1969 賀川 光夫 縄文晩期 九州 新版考古学講座 3
- 1968 佐原 真 日本農耕文化の起源をめぐって 考古学ジャーナル 23
p2-11 その他

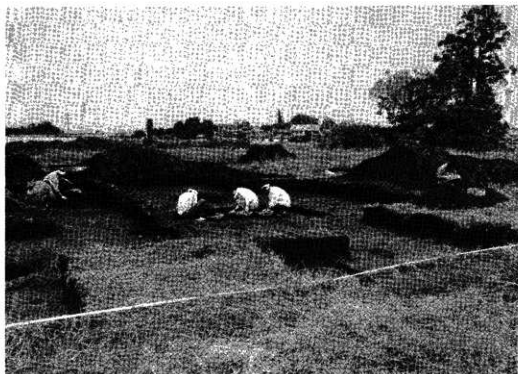
(賀川)



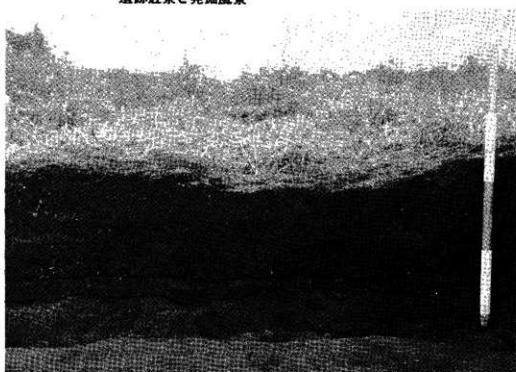
遺跡遠景



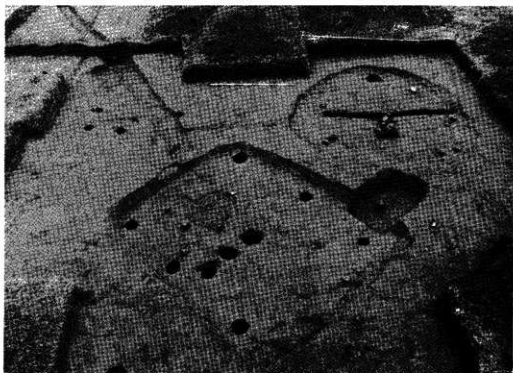
遺跡遠景



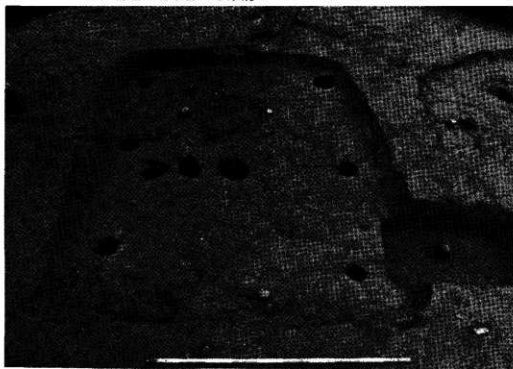
遺跡近景と発掘風景



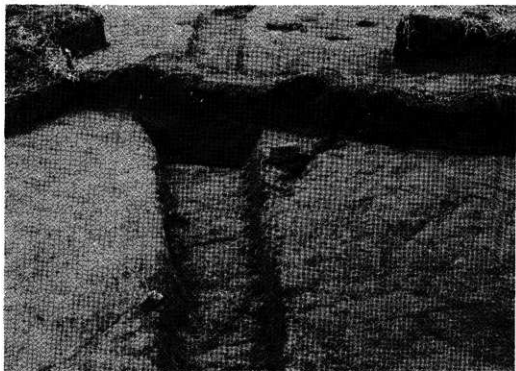
土 層



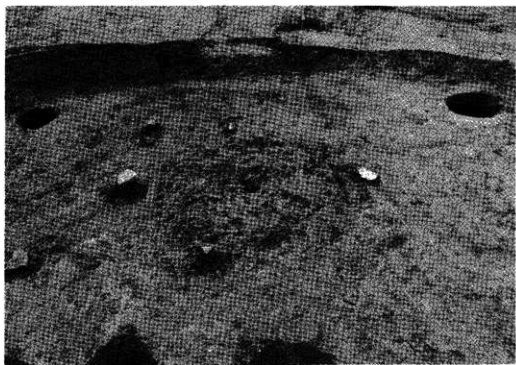
住居址の切り合いと条溝



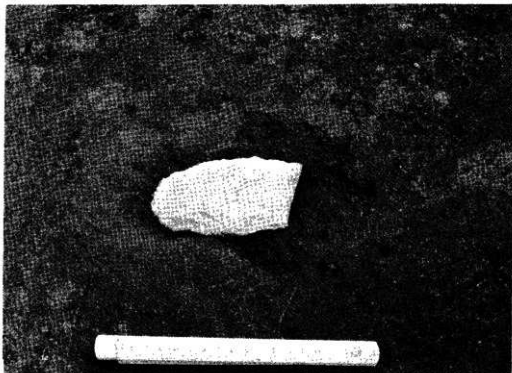
縄文晩期住居地1号



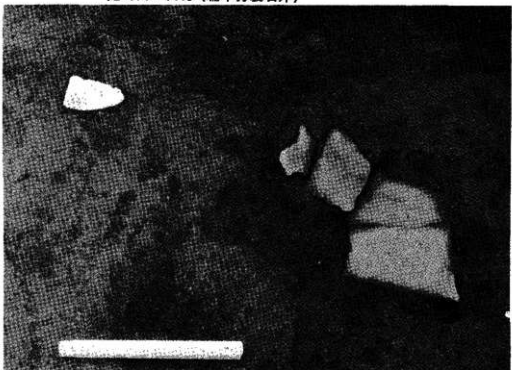
溝状遺構



1号住居址内炉址



遺物出土状況 (扁平打製石斧)



遺物出土状況 (扁平打製石斧・粗製深針)

小高野遺跡調査報告

1974年3月31日

発行 別府大学文学部考古学研究室

賀川光夫

印刷 大分市上野町7番25号

三恵印刷株式会社

